

2023(令和5)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

東京分室 PD 個人研究

宗教及び胎児生命観の変容 についての日台比較研究

研究代表者・元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿
(宗教学)

本研究は現代社会において宗教がいかに胎児生命観の変遷に対応するかを検討するものである。特に日本と台湾の状況に焦点を当て、両者のつながりと関係性を意識しながら、比較研究を行った。過年度の研究方針を継承し、報告者は2023年度において、(1)台湾仏教と民間信仰における胎児生命観、(2)台湾における胎児生命尊重運動の二つの軸を通して研究を進んできた。以下はそれぞれの成果を提示していく。

(1) 台湾仏教と民間信仰における胎児生命観

台湾において、流産、死産や生まれて間もなく亡くなった胎児や夭逝した赤子の霊は「嬰霊」(yingling)と呼ばれる。「嬰霊」という言葉の歴史は長いとはいえず、おおよそ1980年代中盤から使われるようになった。その言葉が台湾社会に広がったきっかけは、1980年代末にある仏教系出版社が複数の新聞紙で広告を掲載することである。広告によって、嬰霊という言葉とその概念が広がった一方、広告の内容及び中絶の崇りを強調する言説、及び大蔵經に収録されていない『長寿滅罪護諸童子陀羅尼經』の使用が批判的となった。特に仏教系の雑誌で論戦が繰り広げられた。そして、筆戦に止まらず、両者の間はさらに訴訟及び訴訟結果に対するデモ活動が生じた。上記の事件の経緯や詳細は、報告者が昨年度に上梓した単著『「水子供養」の日台比較研究－死者救済儀礼の創造と再構築－』(晃洋書房 2023年2月28日)に報告されている。この成果をさらに深め、2023年度において報告者はこの事件を通して台湾仏教における胎児生命観を検討しようと試みた。報告者はまず『仏説胞胎經』、『仏為阿難説処胎会』、『大宝積經』の「仏説入胎藏会」といった仏教經典における胎児発生論を検討し、そして事件以降、台湾の仏教団体が「嬰霊」概念の受容と拒絶の様相を提示した。上記の成果は研究発表、「台湾仏教と胎児生命をめぐる初歩的論考——1980年代末の慈悲精舎事件を手がかりに——」(日本民俗学会第75回年会、2023年10月22日、成城大学)、『「嬰霊信仰」の日台比較研究：家庭結構變遷與宗教儀式的

重組」(佛敎教學工作坊 02、2023年12月28日、佛光大學)に提示している。

また、報告者は台湾の産育習俗における胎児の位置付けを検討した。報告者はまず清代から日本統治時代で台湾の民間に流布する妊娠過程を描く「十月花胎歌」の内容を分析し、その後流産、死産及び異常出産の原因とされてきた「胎神」信仰の現代的意義を検討した。上記の内容は、「現代台湾における胎児の『死』をめぐる宗教実践」(国際日本文化研究センター、第4回共同研究会 2024年2月17日)に発表している。

(2) 台湾における胎児の生命尊重運動の動向

人工妊娠中絶(以下は「中絶」)をめぐる法律面ないし政治面の論争は、公共的な場で胎児の生命への考え方の一側面を示している。2023年度、報告者は台湾における胎児生命尊重運動の調査を継続し、参加する団体の繋がり及び宗教との関わりについて調査を行った。中でも特にカトリック教団の動向に焦点を当てている。台湾におけるカトリック教会は、1980年代初頭および2000年代中盤の2回に渡って、胎児の生命尊重を唱え、政府に法律の改定を要請した。1980年代の初頭について、「中國天主教文化協會」が主導的な役割を担っている。特に胎児の生命尊重を中華文化と道徳が結びつけられる傾向が見える。そして、2000年代以降は、カトリックの呼びかけで結成した「尊重生命全民運動大聯盟」は優生保健法の修正を呼びかけていたが、最終的に失敗に終わった。しかし、これをきっかけに、女性の権利を主張する団体との対立が目されるようになった。上記の研究成果は、「台湾における胎児生命尊重運動の展開——カトリック系プロライフ団体の動きを軸に——」(日本台湾学会第25回学術大会、2023年5月28日、日本台湾学会)で報告した。